海外研修報告書

クリエイティブイノベーション学科研究室
助教　小山さくら

研修期間
2023 年 7 月 31 日～8 月 30 日

研修先：6 カ国 12 都市

- アメリカ（New York）
- カナダ（Montreal）
- オランダ（Utrecht, Amsterdam, Den Haag）
- チェコ共和国（Praha, Kyjov）
- スウェーデン（Stockholm, Gustavsberg）
- デンマーク（Copenhagen, Aarhus, Odense）

研究内容
2023 年 8 月 1 日～8 月 3 日

- アメリカ（New York）

  DAY1

  初日はメトロポリタンミュージアム（写真 1）のコレクションを鑑賞。展示エリアはアメリカ絵画からヨーロッパ、エジプトと多くの国の美術品が収蔵されている。特に印象的だった展示は 2 つあり、1 つめはフランク・ロイド・ライトが手掛けた『フランシス W. リトル邸の部屋』（写真 2）。窓ガラスのデザイン性のあるつくりと、家具はこの部屋のために設計されている。間接照明や色調にどこか日本を感じた。2 つめは『デンドゥール神殿』の空間（写真 3, 4）である。室内で神殿を見るのは少し違和感を感じた。神殿はそこに存在しているが、神殿ではない別のものにも見えた。展示空間は非常にダイナミクスで、神殿を正面に見て右側には大きな窓、手前に大きなプールがあり、どこか安らぎを感じられた。長時間館内を鑑賞し歩き疲れた人々は、縁に腰掛け休む。美術館の中でカフェテリアとは別に、憩いの場がここにはあるように感じた。

  - The Metropolitan Museum of Art
    - 1000 Fifth Avenue
      New York, NY 10028-0198

写真 1

写真 2

写真 3

写真 4

DAY2~3

ニューヨーク近代美術館へ。メトロポリタンミュージアムとは違い、ビジネスマンが多く行き交うビル街の中に建っている。近現代美術の作品を鑑賞し、特に Jennifer Bartlett の作品『Rhapsody1975-76』（写真 5）は抽象的な線と幾何学的な線、そして色は物語性を感じた。

続いてチェルシーマーケットへ（写真 6）。ここはお土産や飲食店が立ち並ぶ中、ギャラリーも併設されている。観光場所として新しく建てられたのではなく、既存の工場を改造した屋マーケット。上階のフロアには観光客は立ち入ることはできないが、オフィスフロアが上階にあり、観光客以外に市民もマーケットを利用していた。

その後、近辺のギャラリーを数か所訪れた。誰でも気軽に立ち寄ることができる。訪れた中で日本人が経営しているギャラリー「Now Here」（写真 7, 8）のスタッフと話すこ

とができた。このギャラリーはニューヨーク在住日本人アーティストのみの作品を展示している。
スタッフの彼は武蔵野美術大学の卒業生でニューヨークの街と人が気に入り、移り住み、現在は展示の企画などを行っている。ニューヨークはエンターテイメント性に優れ、新しいものが次々と生まれ、その試みに対して寛容であると言う。

- The Museum of Modern Art, New York
  - 11 West 53 Street, Manhattan
    New York, New York, 10019
- CHELSEA MARKET
  - 75 Ninth Avenue (between 15th & 16th St.)
    New York, NY 10011
- ギャラリー数カ所
  - Now Here
    - 40 Wooster Street, New York, NY 10013
  - A.I.R. Gallery
    - 155 Plymouth Street
    Brooklyn NY 11201

写真 5

写真 6

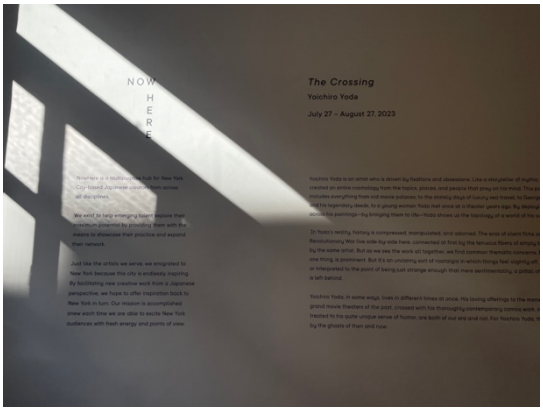

写真 7

写真 8

2023 年 8 月 4 日～8 月 7 日

- カナダ（Montreal）

  DAY1

  渡航失敗のため当初予定していたケベックへの訪問は断念。モントリオールはフランス語圏でもあり、街の表記はフランス語で書かれている。街中を散策していると、壁面ペイントアートが多く見られた。（写真 9, 10）

  ケベック州立図書館（BAnQ）は見学であれば、誰でも自由に出入りが可能。フロアスペースには本を閲覧する以外に、チェスやボードゲームを楽しむ机などが置かれていた。（写真 13）日本の漫画が多く所蔵されており、ゲームなども借りることができる。地下 1 階には子供図書コーナーがあり、カラフルな椅子やクッションが設置されている。特に気になったのは、図書本返却システムと、音楽空間である。図書館の入口にリターン自動ポストが設置されておりベルトコンベアで本が返却される様子が視覚化されていた。（写真 11, 12）BAnQ 登録者であればピアノ 2 台、ギター2 台、ウクレレ 1 台を自由に利用することができる。（写真 14）また、コンピュータステーションもありスコアの作成までできる。楽譜の書き方を紹介するトレーニングをはじめ、図書館ではほぼ毎日何かしらのイベントが開かれている。

  - The Grande Bibliothèque
    - 475 De Maisonneuve Boulevard east
      Montreal, Quebec

写真 9

写真 10

写真 11

写真 12

写真 13

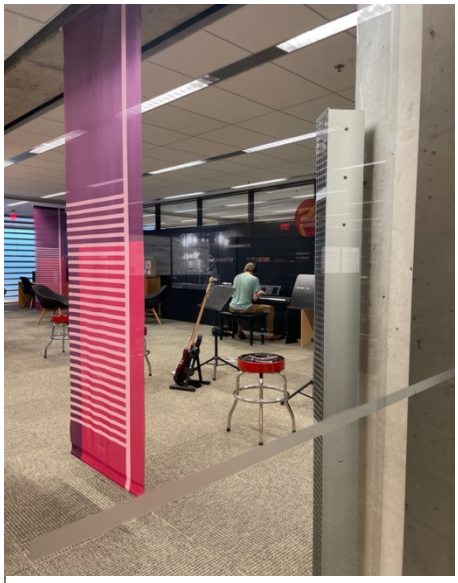

写真 14

DAY2

市民の台所と呼ばれているジャンタロンマーケットへ。（写真 15, 16）モントリオールにある公共市場で最も古い市場である。観光客も多いが、食材を買いに来る市民も多く、市場内にあるカフェ、飲食店でお互いの近況について話し合う様子を見かけた。

バイオスフィアは 1967 年のモントリオール万博にてアメリカのパビリオンとして建設されたもの。（写真 17）水に関する博物館で水資源やエコシステムについての展示がされている。入口に設置されていた連続性のある写真は、地球環境の変化よって大量発生したムクドリの写真。（写真 18）遠くから見るとそれはボールペン画で描かれたようなアート作品に見えるのだが、写真の美しさと写し出している状況が反比例し強く印象に残った。

ノートルダム大聖堂へ。（写真 19）モントリオールはカナダのケベック州にあり、メインで使用されている言語はフランス語である。北米で見られるのはケベックとここモントリオールのみ。入ってすぐ正面に見えたのが、コバルトブルーの光がとても印象的な祭壇。（写真 20）中央の十字架に架けられたキリスト像の他に、両サイドにも複数の像が置かれている。像を照らす光とブルーの光が対照にあり、幻想的な空間であった。サイドのステンドガラスにはカナダの歴史やモントリオールの歴史がモチーフとなっている。メインの礼拝堂の奥へ進むと、サクレ・クール礼拝堂があり全長 5 メートル以上のブロンズ像は力強くとても美しかった。

次に行ったのはモントリオール美術館。カナダ最古の美術館。特に印象に残ったのはイヌイットアートだ。（写真 21, 22）ほとんどが石の彫刻であり、生活で観察した生き物の特徴、形の捉え方など、独創性の高い形は、自分のデフォルメのイラストレーション制作において大きな参考となった。

次に聖ジョセフ礼拝堂へ。（写真 23）正面入口は工事中であった。礼拝堂へ入ると、中央には大きな円形のライトと、アーチ状の造りに特徴があり、サイドに飾られているステンドガラスの配色や図形はイラスト調のようで印象的であった。（写真 24）

礼拝堂から外へ出ると街の景色を一望できる。ベンチや、階段で景色を楽しみながらに過ごす人々が多く見られた。

- Jean Talon Market
  - 7070 Av. Henri-Julien, Montréal, QC H2S 3S3, Canada
- Montreal Biosphere
  - 160 Chem. du Tour de l'isle, Montréal, QC H3C 4G8, Canada
- Notre-Dame Basilica of Montreal
  - 110 Notre-Dame St W, Montreal, Quebec H2Y 1T1, Canada
- The Montreal Museum of Fine Arts
  - 1380 Sherbrooke St W, Montreal, Quebec H3G 1J5, Canada
- Saint Joseph's Oratory of Mount Royal

✧ 3800 Queen Mary Rd, Montreal, Quebec H3V 1H6, Canada

写真 15

写真 16

写真 17

写真 18

写真 19

写真 20

写真 21

写真 22

写真 23

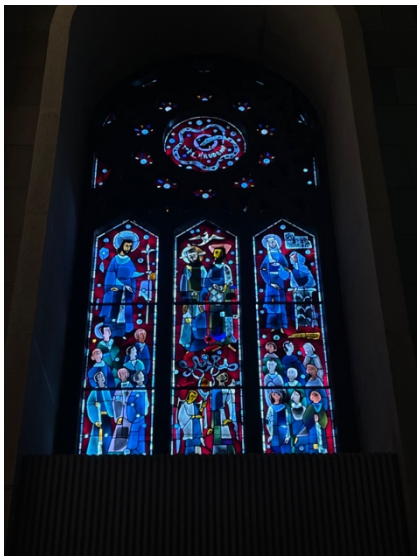

写真 24

DAY3

ダウンタウンの真ん中にある教会、クライスト・チャーチ大聖堂へ。教会入口の階段でカラフルなテープを貼っている作業が目に止まった。（写真 25）PRIDE PARADE の期間でもあり、教会へ入ると祭壇の上にはレインボーの垂れ幕がかかっていた。(写真 26) 日曜礼拝は終わっていたが、パイプオルガンの演奏と聖歌隊の歌の練習が行われていた。小さな教会ではあるが、天井の模様や床の白黒のタイルなど、ネオゴシック様式建築の教会は素朴なあたたかさが感じられた。

- Christ Church Cathedral of Montreal
  - 635 Rue Sainte-Catherine, Montréal, QC H3A 2B8, Canada

写真 25

写真 26

2023 年 8 月 7 日～8 月 11 日

- オランダ（Utrecht, Amsterdam, Den Haag）

  DAY1

  アムステルダム・スキポール空港からユトレヒトへ移動。スキポール空港は空港内のサインやライト、置かれている家具のデザインが素晴らしい。（写真 27）立ち寄ることはできなかったが、空港内に子供の遊び場が 2 箇所あり、空港内にミュージアムもある。待ち時間の過ごし方まで考えられている空港であると感じた。ユトレヒト到着後、街の中心にあるドム教会へ。大きなステンドガラスと柱の彫刻や壁画を見ることができた。（写真 28, 29）ドム教会内には中庭があり、小さな噴水と様々な植物が植わっている。(写真 30)通路から中庭を除くことができ、個々にそれぞれの時間を過ごしている様子が印象的であった。

  - Domkerk
    - Achter de Dom 1, 3512 JN Utrecht, Netherlands

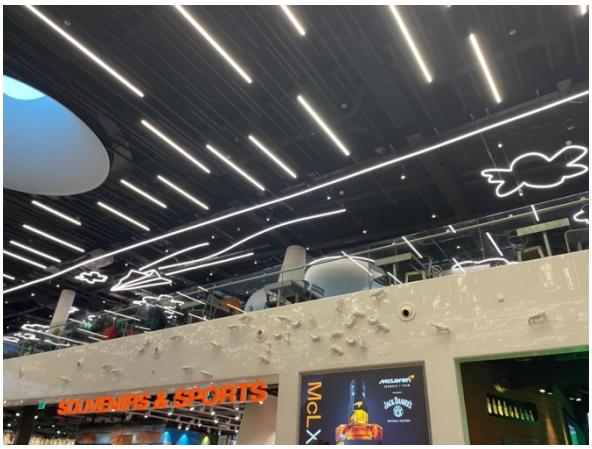

写真 27

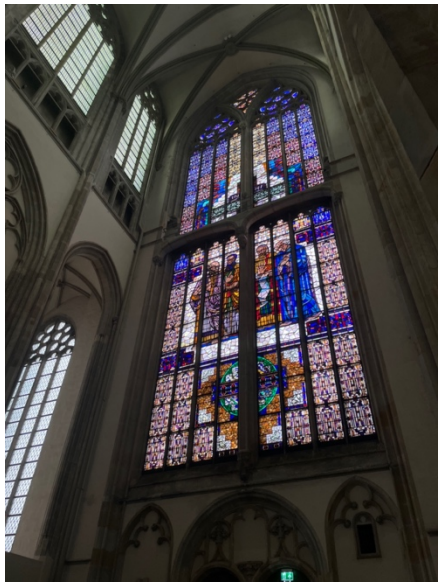

写真 28

写真 29

写真 30

DAY2

アムステルダムへ移動し、アムステルダム国立美術館へ。(写真 31) 公式アプリを使用し、個人のスマートフォンで音声ガイドを聴き学んだ。美術館内フロアの中階にはカフェが設置されていた。美術を見て回りながら、休憩して談話する時間をつくる流れができているように思う。レンブラントの作品が多く収蔵されており、細部にわたる質感の表現に魅了された。代表作「夜警」は公開修復中であり、囲われたガラスの周りにはた

くさんの人だかりができていた。(写真 32) 修復課程を見られるようにした試みは鑑賞者に対する配慮がとても感じられる。
その後、レンブラントの作業場やモチーフが見られるレンブラントハウスへ。特に印象的だったのは、作品の際に用いられたモチーフが集められた部屋。(写真 33) 石膏像、植物、槍、貝など数多くの種類が展示されていた。最上階には石膏像を取り囲むように机が置かれており、自由にデッサンすることができるコーナーがあった。(写真 34) 机にはデッサンのポイントが書かれた紙が置いてある。3〜4 人の 10 代くらいの子どもたちが黙々と取り組んでいる様子は新鮮であった。

- Rijksmuseum
  - Museumstraat 1, 1071 XX Amsterdam, Netherlands
- Amsterdam 散策
- Rembrandt House Museum
  - Jodenbreestraat 4, 1011 NK Amsterdam, Netherlands

写真 31

写真 32

写真 33

写真 34

DAY3

ユトレヒト中央博物館へ。博物館は街の中央から少し外れた場所にある。企画展「NEW HORIZONS」を鑑賞。ユトレヒトと関わりのある作家を取り上げ、絵画から映像までさまざまなジャンルの作品が展示されていた。中でも作家兼芸術家のディルジェ・クルクの作品はエッチングの技術を専門とした作品。（写真 35）インスピレーションはユトレヒトから受け、イタリア都市でも活動を行っていたという。訪れた都市で感じた共通の認識は歴史的階層構造。情景の中に何か深いストーリーを感じさせるような、一枚の写真を見ている気持ちになった。奥へ進むと中間スペースに無人のワークショップコーナーがあった。（写真 36）自分だけの空想の風景をミニキャンバスに描き、設置されている写真ボックス内に置き写真を撮る。（写真 37）他の人が描いたミニキャンバスもあり、空想の風景はカラーもあれば白黒で描かれているものもあり、興味深かった。またワークショップのスペースは大きな窓が横にあり、ゆっくり景色を楽しみながら取り組むことができ良い空間であった。次に目的のディック・ブルーナのアトリエがある最上階の屋根裏へ。（写真 38, 39, 40）日本とは交流が深く、有名な作品はミッフィーである。彼がイラストに取り組む姿勢やイラストが生まれる過程など、展示物や作業場所を通して感じることができた。下絵はなかなか拝見する機会がないため、自身の制作を進める上での大きなヒントとなった。日本の展示では、展示物に説明を加えているものが多いように感じるが、ブルーナのアトリエにはほとんどない。使っていた道具や紙、コレクションしていたものがそのまま展示されているだけである。そのことによって、今も彼がそこにいるような空気を感じることができたのかもしれない。

帰り道、「ペーパームーン」という本屋を見つけた。主に絵本、児童書を多く取り扱っている。しかし中に入ると大人のお客さんが多い。会話を聞いていると、好きな作家の本が多く取り揃えてあり、自分のために購入するのだと店主に話していた。私は David Lucas のサインが入った『Halibut Jackson』を購入。地元の人、観光客幅広い年齢のお客さんから愛されるこの本屋は、店主の文学に対する深い知識とあたたかなコミュニケーションによって成り立っていると思った。

- Centraal Museum Utrecht
  - Agnietenstraat 1, 3512 XA Utrecht, Netherlands
- Paper Moon
  - Oudegracht 254, 3511 NV Utrecht, Netherlands

写真 35

写真 36

写真 37

写真 38

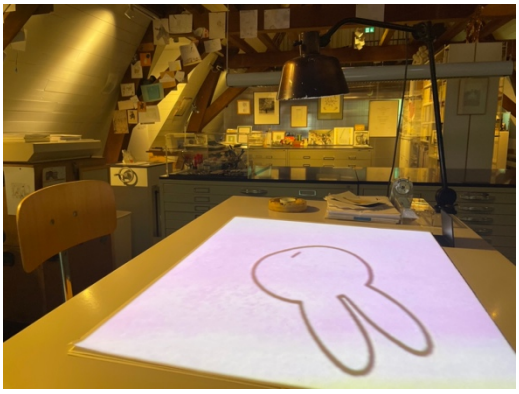

写真 39

写真 40

DAY4

ナインチェ博物館はユトレヒト中央美術館の真向かいにある。日本ではミッフィーやうさこちゃんと呼ばれているが、オランダ語ではナインチェという名前で呼ばれている。外には大きなミッフィーのオブジェがお出迎え。中に入ると全てがミッフィーのキャラクターたち、絵本の色彩が使用されている。この博物館のコンセプトは自分が絵本の中に入り込んだ感覚になる。博物館内のカフェのスタッフまで絵本に出てきそうなコック帽、コック服、エプロンを着用している。(写真 41) トイレはファミリートイレ仕様で男女共有だ。展示に進むと全て子供の目線にあわせて設計されている。料理体験、お医者さん体験、農場体験などができる道具や衣装が置いてあり、遊びながら学ぶことができる。(写真 42) 大人も一緒になって遊んでいる様子は印象的であった。

ユトレヒトからデン・ハーグへ移動し、マウリッツハイス美術館へ。美術館近くにあるクーカンプ公園では骨董市が開かれており、地元の人も多かった。(写真 43) 美術館へ入ると公式アプリの音声ガイドを使用し、作品への理解を深めた。レンブラントの作品も多数収蔵しているが、メインはフェルメールの『真珠の耳飾りの少女』。厳重に柵があり近づけないようになっている。(写真 44) オランダ国立博物館よりは混雑していなかったため、じっくり鑑賞することができた。美術館からデン・ハーグ中央駅までの道中は多くのカフェやレストランで賑わっており、まだ陽は明るかったが多くのお客で賑わっていた。(写真 45) ほとんどのお店は前にテーブルを出し、外で料理や会話を楽しんでいる。日本に帰って気付いたが、この光景は日本ではあまり見られないように思う。席を明確に区切らないことで、お客同士のコミュニケーションが生まれているように感じた。

- nijntje museum Utrecht
  - Agnietenstraat 2, 3512 XB Utrecht, Netherlands
- Den Haag 散策
- Mauritshuis
  - Plein 29, 2511 CS Den Haag, Netherlands

写真 41

写真 42

写真 43

写真 44

写真 45

DAY5

オランダ最終日はシュレーダー邸へ。(写真 46) へーリット・トーマス・リートフェルトによって設計され、ユネスコ文化遺産に登録されている。シュレーダー夫人のために建てられたシュレーダー邸は書斎やメイド室、リビング、子供の部屋などの部屋がある。特に驚いたのは、2 階は全て間仕切りによって部屋が存在している。スタッフが決まった時間に間仕切りを開閉する。全ての仕切りがオープンになると部屋全体の雰囲気が大きく変わる。仕切っていた戸の収納先までデザインがされている。レッドアンドブルーラウンジチェアなどリートフェルトが手掛けた椅子や机も置かれていた。(写真 47) 見た目だけではない機能性もあり、だが生活感を感じられるデザインであると感じた。

Rietveld Schröder House

- ✧ Prins Hendriklaan 50, 3583 EP Utrecht, Netherlands

写真 46

写真 47

2023 年 8 月 11 日～8 月 15 日

- チェコ（Praha, Kyjov）

  DAY1~2

  4 年に 1 度 3 日間開催されているフォークロアフェスティバル『スロヴァツキー・ロク』に参加するため、4 時間かけてプラハからキヨフへ。キヨフは小さな町で人口は約 11,000 人。プラハから列車で相席になった地元の人に少し話を聞くと、イベントに参加していて、基本的にキヨフ周辺の街から多くの人がイベントを楽しみに参加する、地元のお祭りのようなものだと言う。キヨフの中心街からはじまり街全体でお祭りが行われていた。プログラムは衣装のパレードや合唱発表、演奏、民芸品の販売や伝統料理販売など。（写真 48, 49, 50）キヨフスケの衣装は様々な模様が刺繍されていて、多様なバリエーションがある。午後には衣装を着た 100 名を超える出演者が決まったコースを行進する。（写真 51, 52）馬に乗る人、子供と一緒に行進する人、楽器を演奏する人など色々なスタイルで決まったコースを歩く。沿道から間近に伝統衣装を見ることができた。キヨフの伝統、伝承を大切にし、大勢でお祝いをするフェスティバルに対する地元の人の姿勢は日本の地方のお祭りと通ずるところがあるように感じた。

  - Slovácký rok（http://www.slovackyrok.cz/index.asp）

写真 48

写真 49

写真 50

写真 51

写真 52

DAY3

キヨフからプラハへ移動。オベツニー・ドゥームのあるプラハ市民会館へ。（写真 53）市民会館はアール・ヌーヴォ様式の豪華な装飾が多く施されている。（写真 54, 55）またこのドゥームでは週に数回音楽コンサートが開催されている。プラハは春に音楽祭を開催する音楽の都でもあり、市民と音楽芸術の距離間が近くにあるように感じた。

- オベツニー・ドゥーム（スメタナ）
  - Náměstí Republiky 1090, 110 00 Staré Město, Czech

写真 53

写真 54

写真 55

DAY4~5

聖ヴィート大聖堂はプラハ城内に位置し、プラハで最も大きく重要な教会である。（写真 56）大聖堂はゴシック様式。大聖堂には多くのステンドグラスがあり陽が差し込むとグラス色によって雰囲気が変化する。石彫や柱の装飾、扉の装飾、豪華な銀食器など多くの芸術品を観察することができた。特に印象的だったのは、アルフォンス・ミュシャがデザインしたステンドグラス。(写真 57) 青から黄色にかけるグラデーションの色調と、ステンドグラスとは思えないほどの細かな描写、物語を読み進めるような流れを感じる構図が強く印象に残った。

プラハ場内には小さな個人のお店があり、個人で制作したクリスマスオーナメントや、石鹸、手作りの人形などが売られていた。(写真 58, 59) 城から歩いた先にあるカレル橋では、似顔絵屋、アクセサリー屋が道に椅子とイーゼル、ラックを広げて商売をしていた。日本ではブースを設けて何か商売をすることが多いように思うが、プラハではとても簡易的にスケッチをするような感覚で行い、それらが異質のものとして周りが受け止めていない雰囲気を感じ、非常に新鮮であった。

ハヴェルスカー市場では数点のおもちゃ屋があり、お店のディスプレイはそれぞれ独創性の高いものだった。メリーゴーランドのようにおもちゃが回り続けるものや、鳥が上下に動き続けるなど、入店前から高揚感でいっぱいになる。ここで多く見られたのは人形や木製のおもちゃ。色使いやキャラクターの造形など特徴があり、創作において大変参考になった。

- St. Vitus Cathedral
  - III. nádvoří 48/2, 119 01 Praha 1-Hradčany, Czech
- カレル橋
  - Karlův most, 110 00 Praha 1, Czech
- ハヴェルスカー市場
  - Havelská 13, 110 00 Staré Město, Czech
- Mucha Museum
  - Panská 7, 110 00 Nové Město, Czech

写真 56

写真 57

写真 58

写真 59

2023 年 8 月 15 日～8 月 19 日

- スウェーデン（Stockholm, Gustavsberg）

  DAY1~2

  北方民族博物館には、近世代から現代までのスウェーデンの文化、民族に関わる展示が行われている。建物はルネサンス建築が取り入れられており、正面玄関から入ると受付の円形状のカウンターがあり、奥へ進むと、グスタフ 1 世の大きな肖像彫刻がある。（写真 60）この彫刻は 2 階通路からも近くで見ることができ、360 度から観察することができた。1 階の展示会場では、地球温暖化が南極に与える影響に関する展示と、北方民族の暮らしに関する展示。（写真 61, 62）一番驚いたのは、プロジェクションマッピング、照明の演出など氷を感じさせるような演出が取り入れられていた。北方民族の暮らしの道具、テキスタイルなどを見ることができ、その民族性ある配色は美しく、自分の目指す生活を感じられるあたたかい印象に近いものであった。

  2 階には、スウェーデンの 1 年間の暮らしに関する展示があり、シーズンごとにブースが設置され、生活様式の一部分を体験しているような感覚になった。（写真 63）

  スウェーデンの伝統工芸品、ダーラナホースを取り扱う販売兼、展示も行っている「WOODEN HORSE MUSEUM」へ。（写真 64）店内は写真撮影が NG なため、記録写真はないが様々な職人が作ったものから、着色前のダーラナホースが展示されていたりと制作過程も見ることができた。

  次に、ストックホルム市立図書館へ。モダニズムな建築デザイン。エントランスホールは円形ホールとなっており、360 度すべてが本棚となっている。（写真 65）置かれている照明や家具どれもがデザイン性の高いものばかりだ。市立図書館ではあるが、そのデザイン性の高さから訪れる観光客も多く、気軽に見学ができる。閉館時間間際に訪れたのだが、利用者を退館させる方法には驚いた。大きな鐘をもったスタッフが鳴らしながら巡回していくという古典的なスタイル。館内放送が一番手軽に思うが、このスタイルは一つの演出、パフォーマンスのようにも感じられた。

  - Nordiska museet
    - Djurgårdsvägen 6-16, 115 93 Stockholm, Sweden
  - WOODEN HORSE MUSEUM
    - Stortorget 14, SE-111 29, Stockholm, Sweden
  - Stockholm 市立図書館
    - Odengatan 53, 113 50 Stockholm, Sweden

写真 60　　写真 62
写真 61　　写真 63
写真 64
写真 65

DAY3

ストックホルムから 1 時間 30 分ほどかけてグスタフスベリへ移動。移動の際は地下鉄を利用したのだが、ストックホルムには「地下鉄美術館」が存在する。様々なアーティストが各所駅でテーマを設定し、壁面にペイント、オブジェが設置されている。アート作品だけではなく、そのテーマとアーティストの紹介コーナーも設けられており、ストックホルムの 90 駅以上が地下鉄美術館となっているようだ。私が利用した駅はソルナセントルム駅。（写真 66, 67）環境破壊、過疎地、自然など 1970 年代の社会問題がテーマとなっている。

まず向かったのは、「アーティペラーグ」という美術館。（写真 68, 69）周りは湖、森林に囲まれ、駅から遠く離れた場所に存在する。周りの環境に馴染むように建物は設計されている。展示室は大きく 2 つあり、1 つは”北欧芸術の 100 年”をテーマに絵画、オブジェ、写真、映像作品などが展示されていた。展示会場が特に印象的であり、地下展示室へ行くと、大きな石が座席の後方に見え、雰囲気のある空間であった。（写真 70）恐らくその石は、美術館が建つ前から存在していたものと思われる。また、美術館の所々に大きな窓があり、建物を取り囲む湖や森林、外の景色を見ることができる。（写真 71）作品だけでなく、周りの景観の美しさを丁寧に取り入れられていると感じた。

2 つめはイベント型展示となっており、“IMAGE MONET”というクロード・モネの作品を用いた巨大プロジェクションマッピング。入口を進むと、まずモネの生涯、作品について解説されたパネルが右（英語）、左（スウェーデン語）に展示されている。（写真 72）さらに奥へ進むと巨大なブラックボックス空間に壁面、床一面にモネの作品が映し出されていた。（写真 73）中央には S 字型の仮説壁があり、周りに椅子が設置されているが、鑑賞者は椅子を持ち歩き、好きな位置から鑑賞することもできる。映像と同時にモネの作品と関係するクラシック音楽が流れ、幻想的な雰囲気に包まれていた。アート作品を用いたプロジェクションマッピングの展示は作品を過剰に演出してしまう印象が強いのだが、この展示はモネの世界観を引き出しているように感じる。作品が描かれた背景や情景を早期させるような、エフェクト、映像の切り替わり。何より音楽は演出において、重要な役割を果たしているように思う。

同じグスタフスベリ内にある、陶芸家のリサ・ラーソンの工房「KERAMIK STUDION」と「陶磁器博物館」に足を運んだ。（写真 74, 75）工房ではリサが制作した作品を職人によってこの工房で形にしている。工房はさほど広くはなく、手前が販売エリア、奥が制作工房となっており工房エリアには一般客は立ち入りができないようになっている。こうした販売兼工房ショップは、制作の裏側はあまり見せないことが多いように思うが、ここでは釜へ入れる直前の作業や、着色など、作品が出来上がる過程を楽しむことができる。実際に制作されている様子が分かると、作品に対してもより愛着が湧くのではないか。

次に陶磁器博物館へ、入口を入ってすぐお土産ショップ、1 階奥に陶磁器をつくること

ができるワークショップコーナーがある。展示会場では便器、バスタブが誕生した過程の展示。（写真 76）サインや展示台の壁がタイル調だったりとデザイン性を感じた。2 階は陶器で作られた王宮で使われていたもの（写真 77）や、日常食器類などが展示されている。特に印象的だったのは、50 種類以上のお皿。（写真 78）デザインパターンの種類の多さに驚き、生活に彩りを与えるためのデザインが根付いていることを実感した。

- Artipelag）
  - Artipelagstigen 1, 134 40 Gustavsberg, Sweden
- Keramikstudion Gustavsberg
  - Odelbergs väg 5, 134 40 Gustavsberg, Sweden
- The Gustavsberg Porcelain Museum
  - Odelbergs väg 5, 134 40 Gustavsberg, Sweden

写真 66

写真 67

写真 68

写真 69

写真 70

写真 71

写真 72

写真 73

写真 74

写真 75

写真 76

写真 77

写真 78

DAY4~5

ヴァーサ号博物館へ。北方民族博物館の近くにある、海事博物館。館内には出航してからすぐに沈没したヴァーサ号の実物が保管されている。（写真 79）1628 年に出航し沈没したのだが、海底に沈んだものを引き上げ、修復する技術に関する展示から、ヴァーサ号誕生に関わる展示、船が完成するまでの技術に関する展示、装飾の着色に関する展示が模型や音声ガイダンスなどでとても詳しく、説明されていた。（写真 80, 81）

続いてスカンセンへ。（写真 82）スカンセンは世界で初めての野外博物館と言われており、宿主も年間パスポートで家族と年に何回か遊びに行くという、観光客だけではなく地元の人もよく通っている博物館であることが分かった。スウェーデンの各地から歴史ある建物が移築され、当時のままの建物を見ることができる。面白いのは、展示だけでなく水族館や、動物園などもありテーマパークのような博物館である。特に注目したのは、工房街と衣装（当時の服装）で演奏、話をする人々。工房街は職人が作ったガラス製品や器などが各小屋の中で販売されている。ガラス工房は公開型となっており、ワークショップも行っている。（写真 83）道を歩いていると、衣装を着た 2 人組の演奏者が演奏をしていた。（写真 84）特別ショーというわけでもなく、道で演奏をしているだけだ。遠くから眺める人や、子供と一緒に踊ったりなど、周りも自由に過ごしている。日本では演奏は静かにしっかり聞くもの、という印象が強いように感じるが、ここでは音楽に対する向き合い方の違いがあると感じた。建物の中にもところどころ衣装を着た人がいた。（写真 85）常に説明をしているわけでもなく、来た人に挨拶をして質問があれば答える。本当に当時の人がそこにいるような感覚にかられた。展示というと説明や特別なパフォーマンスを行いがちであるが、スカンセンでは当時の暮らしのリアリティを感じるような展示であるように感じた。

- Vasamuseet
  - Galärvarvsvägen 14, 115 21 Stockholm, Sweden
- Skansen
  - Djurgårdsslätten 49-51, 115 21 Stockholm, Sweden

写真 79

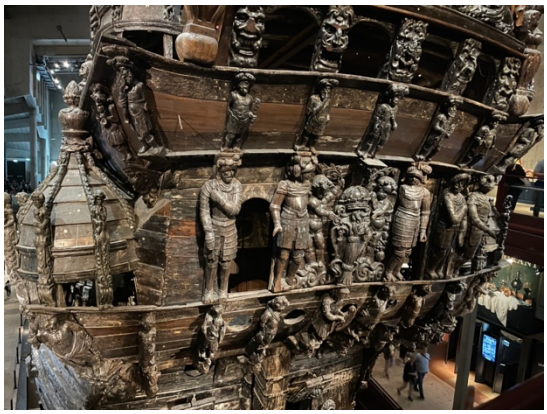

写真 80

写真 81

写真 82

写真 83

写真 84

写真 85

2023 年 8 月 19 日～8 月 29 日

- デンマーク（Copenhagen, Helsingør, Aarhus, Odense）

  DAY1~2

  コペンハーゲン国立美術館は絵画、彫刻から現代美術まで多くの作品が展示されている。館内で目に止まったのは、ドローイング室。（写真 86）数点のモチーフが設置されており、各モチーフ台にアルファベットがふられている。紐づいたアルファベットの引き出しを引くと、アーティストが書いたドローイングが展示されていた。来場者はカルトン、画用紙、鉛筆、木炭、パステル等を自由に使うことができ、その場でドローイングをすることができる。描いたものはボックスへ提出することができる（提出先は不明）。ドローイング参考資料なども置かれていた。印象的だったのはハンス.J.ウェグナーの CH24 Y チェアが各展示室で多くみられたことだ。（写真 87）チェアは部屋の中心に置かれているのだが、空間に非常に馴染む。展示室に沿って配置された様々な椅子はデンマークの椅子に対する意識の高さを感じた。

  ヴェンヘルム・ハンマースホイの作品が多く収蔵されている、ヒアシュプロング美術館へ。（写真 88）実業家のハインリヒ・ヒアシュプロング自身が収集したコレクションがあり、絵画以外にも家具の数々を見ることができた。ヴェンヘルム・ハーマスホイの弟であるスヴェン・ハーマスホイの企画展示があり、陶器の作品と素描、絵画の作品を鑑賞した。彼の作品『Skovbryn』は緑の色彩、木々の柔らかさ、全て表現力の高さから自然に対する想いと情熱を感じた。（写真 89）

  - Statens Museum for Kunst
    - Sølvgade 48-50, 1307 København K, Denmark
  - The Hirschsprung Collection
    - Stockholmsgade 20, 2100 København, Denmark

写真 86

写真 87

写真 88

写真 89

DAY3

コペンハーゲンからヘルシングエーアへ移動し、クロンボー城を見学。（写真 90）クロンボー城はユネスコの世界遺産にも登録されており、シェイクスピアの作品「ハムレット」の舞台モデルとなっている。城の周りには多くの緑と、海に面している。中へ入ると貴族の衣装を着たキャストが椅子に座って、来場者と話をしている。（写真 91）当時城に住んでいた人の設定で、自分の家族構成や当時の話などを演劇的に解説していた。子供も多く、シェイクスピアの作品と関連付けながら、大人から子供も楽しめるコンテンツなどがあった。（写真 92）

コペンハーゲンへ戻り、ローゼンボー城を見学。コペンハーゲン内に存在する小さなお城である。王族の宝飾品や食器類が多く展示されていた。金や銀の豪華な装飾品だけではなく、中には工芸品も見られ華やかさの中に素朴さが感じられた。（写真 93, 94）お城の前には「王の庭」があり、誰でも自由に出入り利用することができる。学生がゲームをしたり、ベンチに座って読書する人など、それぞれの時間を自由に過ごしていた。（写真 95）

中心地から少し離れた場所に、「コペンヒル」というスキー場がある。（写真 96）建物は廃棄物発電所とスキー場を組み合わせた施設。廃棄物の焼却時に発生する熱を活用して、暖房などのエネルギーに変換している。焼却場というゴミが集まる場所は、今まで良いイメージを抱かれることが少なかったが、この「コペンヒル」はスキー場、ハイキングコース、クライミングなど娯楽を楽しむことができる。イメージをデザインによって変化させた。街中でも分別に対する意識を感じることは多々あったが、改めて環境問題に対する意識とデザイン性の高さを感じた。閉館時間に行ったため、施設内、ゲレンデ側に入ることはできなかったが、ボルダリング場で、楽しむ人々を見ることができた。（写真 97）

- Kronborg Castle
  - Kronborg 1B, 3000 Helsingør, Denmark
- Rosenborg
  - Øster Voldgade 4A, 1350 København, Denmark
- The King's Garden
  - Øster Voldgade 4A, 1307 København, Denmark
- CopenHill
  - Vindmøllevej 6, 2300 København, Denmark

写真 90

写真 91

写真 92

写真 93

写真 94

写真 95

写真 96

写真 97

DAY4

グルントヴィークス教会へ。建築家でもあり、家具デザイナーでもあるコーア・クリントとその父の 2 人によってデザインされ建てられた教会である。入ると中央に通路があり、両脇にチャーチチェアがびっしり並べられていた。(写真 98) チャーチチェアは教会で使用されることを前提にした作りとなっており、背もたれの背面に賛美歌集を入れるためのボックスがある。(写真 99) 教会は自由に出入りができ、前撮り衣装をきた新郎新婦が礼拝堂内で撮影している様子もみられた。

フィン・ユール・ハウスへ行くため、オードロップゴー美術館へ。美術館周りはたくさんの自然に囲まれており、静かな場所に位置する。企画展の「JESPER CHRISTIANSEN AT ORDRUPGAARD」を鑑賞。(写真 100) 作品のためのドローイングメモも展示されており、彼の作品の軸になる日常の観察は重要なものであると感じた。オードロップ

ゴー美術館の新館は建築家ザハ・ハディドによって設計された。（写真 101）モダンな旧館の雰囲気を壊すことなく、湾曲した大きな窓からは光が差し込み、カフェテリアの空間に自然光が降り注いでいる。
フィン・ユール自身が設計・建築した自邸が美術の敷地内にある。室内はユールがデザインしたチェアやテーブル、キャビネットなどが置かれており、まだユールが住んでいるような、そのままの状態で残されていた。（写真 102）家具の他に、ドアや天井にブルーやグリーンが取り入れられており、（写真 103）色彩に対するユールのこだわりを感じることができた。

- Grundtvigs Church
  - På Bjerget 14B, 2400 København NV, Denmark
- Ordrupgaard
  - Vilvordevej 110, 2920 Charlottenlund, Denmark
- Finn Juhl House
  - Vilvordevej 110, 2920 Charlottenlund, Denmark

写真 98

写真 99

写真 100

写真 102

写真 101

写真 103

DAY5~6

コペンハーゲンからオーフスへ移動し、アロス・オーフス美術館へ。屋上にはオラファー・エリアソンの作品「Your Rainbow Panorama」があり、360 度レインボー色のガラスを通してオーフスの街を見ることができる。（写真 104）展示「Far From Home II」は家の概念と現代社会で個人が直面する課題に対し焦点をあて”家はどこにあるのか”という問いがテーマとなっており、複数の作家による展示である。家という概念の捉え方は様々であり、その捉え方によって関わってくる個人範囲の問題から社会の問題までスケールが変化する。その社会に対する問いかけを作品を通じて感じた。

次にオーフス市庁舎へ。アルネ・ヤコブセンとイーレク・ムラによってデザインされた市庁舎である。外見はグレーのコンクリートの建物で一見普通に市庁舎のように見えるのだが、中へ入ると温かな照明ライトに客船の中をイメージさせるような通路、階段。（写真 105, 106）エレベータの作りも古くこじんまりしている。所々にはウェグナーがデザインした家具が多く見られた。1941 年から現在まで当時の状態を保ちながら大切に使用されている様子が感じられ、非常に感銘を受けた。

「Tusindfryds Loppeland」へ。この店は不要になった家具や壊れた家具などを修理して再利用販売するリサイクルショップ。倉庫 1 フロアにたくさんの家具が売られている。（写真 107）色とりどりの家具があり、デンマーク様式を感じさせる。お店の人に少し話を聞くと、店主の感覚でセレクトしているという。座面がボロボロになってしまったものは生地を張り替えることで、また新しく使用することができる。良い家具は修理をすれば長く使用することができるので、1 つでも多く修理し、多くの人に使ってもらいたいとオーナー強い想いを聞くことができた。

- ARoS – Aarhus Kunstmuseum
  - Aros Allé 2, 8000 Aarhus, Denmark
- Aarhus City Hall
  - Rådhuspladsen 2, 8000 Aarhus, Denmark
- Tusindfryds Loppeland
  - Trindsøvej 10, st, 8000 Aarhus, Denmark

写真 104

写真 105

写真 106

写真 107

DAY7~9

オーフス市内を歩いていると、路上パフォーマンスを見かけた。（写真 108）それは「UNITED CHANGE（https://www.unitedchange.dk/）」というオーフス都市内で、国連が定める持続可能な開発目標（SDGs）の 17 を実現する芸術作品を見ることができる、期間限定のイベントだった。私が見たパフォーマンスは目標 1 の「貧困をなくそう」に関連したもの。自給自足と題し、Stig は合計 30 時間そこに居続ける。彼の代わりを希望する者が現れた場合、一時的にその場を離れることができ、基本的には食べ物や飲み物は自ら取りに行くことはできず、周りからの支援が頼り。特定の場所ではなく、市内の場所において、イベントが開かれることは市民にとって、より身近に捉えることができるのではないか。

オーフスからオーデンセへ移動し、オーデンセ市立博物館へ。フュン島で発掘された史跡や道具、バイキング時代についてなど現物展示、映像投影を用いて展示がされている。ボックスを開けると音がなる仕組みや簡易的なゲームが設置されていたり、子供も楽しめるよう工夫がされていた。(写真 109) 博物館の施設は複数あり、「Children backyard」では建物に工房室があり、子供たちはノコギリ、ハンマーなどを使って端材を加工する

体験をしたり、外にあるウォーターポンプを操作したりと 120 年前のオーデンセの暮らしを体験することができる。（写真 110, 111）「Østerbye's House」は人形職人の小さな工房。室内には様々な大きさのマリオネットと制作途中の作品が置いてあった。（写真 112, 113）定期的にオーデンセの街中でマリオネット劇を行っている。
次にアンデルセン博物館へ。博物館は建築家隈研吾によって設計され、2021 年に完成した。博物館の周りには植物が多く植わっており、植栽豊かな景観だ。中は大きな木柱が円形状に広がっており、大きな窓も印象的である。（写真 114）展示室へ進むとヘッドフォンが渡され、各展示エリアのポイントに立つと音声が流れる。アニメーション映像や光を使った演出、インタラクション性を取り入れた展示が多くされており、子供から大人まで楽しみながら学ぶ工夫がある。（写真 115）展示室入口のサインは立体文字で表記されていたり、（写真 116）壁にイラストが用いられていたりなどデザイン性が高かった。訪問時には見ることはできなかったが、「VILLE VAU」という 2 歳～12 歳までを対象としたイベントが定期的に開かれ、アンデルセンの芸術に触れながらインスピレーションを得て自由に創造するというもの。子供の時期から芸術に触れ、創造力を高める機会を多く作っている印象を受けた。
オーデンセからコペンハーゲンに戻る。

- Møntergården
  - Møntestræde 1, 5000 Odense C, Denmark
- H.C. Andersen's Museum
  - H.C. Andersen Haven 1, 5000 Odense C, Denmark

写真 108

写真 109

写真 110

写真 111

写真 112

写真 113

写真 114

写真 115

写真 116

DAY10~11

デンマーク自然史博物館にある植物園へ。（写真 117）植物園ハウスはロンドンのクリスタルパレスからインスピレーションを受け、設計されているという。蝶のライフサイクルをテーマにした展示ハウスがあり、ハウスの中で数種類の蝶が舞っており近くで観察することができる。（写真 118）植物園の周りは大きな庭園になっており、植栽を観察する人や、芝生の上で昼寝をする人、会話を楽しむ人、ティーブレイクをしている人など、穏やかな時間を過ごしている人を多く見かけた。（写真 119）植物園ハウスへ入るには料金がかかってしまうが、庭園は誰でも自由に利用することができる。このような余白のある公共の場は、ちょっとした休息をとるために必要であり、デンマークに多く見られるように思う。

次にフレデリスク教会へ。大きな緑色のドーム屋根が特徴的であり、大理石が多く使われている。入ると中央に礼拝堂があり、（写真 120）柱より手前は通路になっている。ドーム上の屋根の裏側には 12 人の弟子たちが描かれていた。（写真 121）照明は最低限で、窓から差し込む光が印象的であった。

最後にカステレットへ。（写真 122）ここはコペンハーゲンにある要塞で、星型と特徴的な形をしている。敷地内軍の兵舎などがあり、今は使われていないが大砲なども置いてあった。エンジ色や黄色い建物の色が多く建っており、小さい教会もある。要塞と聞くと、少し入りづらいイメージがあったのだが現在は市民が憩う場所として使用されている。星型の形に沿って土手のように少し高台になっているので見晴らしが良く、ランニングしている人を多く見かけた。（写真 123）また、ベンチが所々に設置されており、会話を楽しんだり、読書や、景色を眺めている人なども見かけた。コペンハーゲンにはシティの機能性を持ちながら人々が休息できる公園や庭園が多く存在していた。

- Statens Naturhistoriske Museum
  - Øster Farimagsgade 2C, 1307 København, Denmark
- Frederiks Kirke
  - Frederiksgade 4, 1265 København, Denmark
- Kastellet
  - Gl. Hovedvagt, Kastellet 1, 2100 København, Denmark

写真 117

写真 118

写真 119

写真 120

写真 121

写真 122

写真 123